

は、日本に帰国して三年になるが日本語はまだ覚えられず、生活習慣の違いから、戸惑うことが多く、自分の力で生活を立てるのが非常に難しい状況にあるが、私も機会あるごとに妹の家庭を訪問し、妹達家族の幸福のため、万難を排し、手助けに最善をつくしている。

## 一族あげての開拓団の果ては

福島県 立花 開

昭和十五年二月、大陸に夢と希望に燃え、勇躍して満蒙開拓第九次福島県集団開拓団の一員として渡満し、三江省富錦県肇架山に入植した。しかし、団の運営について意見が対立し、大槻町出身の私達家族と、同じ安積郡山出身の四大家族がなんの調査、事情聴取もなく、突然昭和十七年五月、団を追放されてしまった。

行くあてもなく、妻と三人の子供を連れ、山中を流浪していたが、第十次集合緑ヶ丘開拓団に潜入した。

この開拓団は、十戸足らずのちいさな浪人集落で、力はなく、営農気力にも欠け、その日その日をただ慢然と過しているような集団であった。私は独力独歩、石の上にも三年と精一杯働き続けた。

そして、ついに生活基盤を確立し、これから渡満の志が達成できると前途に明るさが見えてきた時であったが、昭和二十年五月、現地召集となり入隊した。

ソ連軍参戦で八月十三日避難命令が出て、妻は妊娠九か月の身重の体で三人の子供と少しばかりの荷物を抱えて出発し、佳木斯市より列車で綏化経由で奉天に到着した。

収容所の生活は悲惨きわまりなく、このままでは全員死ぬほかないと思ひ、長男兼を中国人に預けたが、寒さと飢えから生まれたばかりの次女が死亡、次男も昭和二十年十月、一か月間に二人の子供を死なしてしまった。妻は中国人宅に身を寄せたが、昭和二十一年十月重病のため死亡し、長女は、そのまま残留した。

昭和十九年四月、私の両親は家族七人で第十二次郡山分郷集団開拓団員として三江省依蘭県西阿に入植

し、水田開拓を担当して苦勞の連続であったが、終戦で山河を踏み迷い、女子供數十人を連れ、責任者として雨中の難行進数十日で方正街に到着したが、飢餓と寒さで死亡者が多数でした。ここで越冬することになったが、両親、妹、妹の子二人、弟妹の子三人計八人が死亡した。中には生まれたばかりで名前もつけずに死亡した者も二人あった。

私はソ満国境で捕虜となり、シベリア奥地に強制連行され、三年半で病院入退院三回、十三か所を転々した強制労働更に飢餓と極寒と家族の心配と、敗戦の絶望から心身消耗し、ついに病人同様となってしまった。

それはシベリアで作業中、落石が頭と肩にあたり、骨折脱臼、脳が割れ散ったような衝撃で過去の記憶が瞬時に脳裏を飛び交う次に恐怖も苦痛もない安静な死の深い穴に吸いこまれるようになったが、人びとに呼びもどされ、生き返った。

このような状況で、昭和二十三年十二月、祖国日本に帰国することができた。先に帰ってきた弟を頼って、現在地に入植することになったが、同じ開墾であり、

心身ともに虚脱状態で途方に暮れた。ソ連の囚人生活よりは自由で、寒さもひどくなかったが、生きる望みも目標もなく、明日の命もおぼつかない夢遊病者の生活がつづいた。しかしこの安達太良山麓の不毛の岩石を掘りに掘って、開拓し、ふしぎにも死なずに現在に至っている。

両親、妻子、その他弟妹、その子供合わせて、十余人が死亡し、その追悼碑を家に建て、毎日供養をしている。弟もソ連に二年抑留され、帰国したが、その後遺症で一人前の働きができずにいる。

私が最初に大槻町から渡満し、後から二十余家族百数十人が開拓団員として入植した。そのうち四十余人の死亡が確認されたが、生死不明の者も多く、生きてきた人は半数にもみえない。

この人達の運命を狂わせたのは、私の責任と思っているが何もすることも出来ず両親妻子、知人等の顔が思い出され、その苦しみや悲しみが目に見え寝ても醒めても私の脳裏を去らない。

中国人に預けた長男薫は、九年前永住帰国し、中国

での医者を経験を活かし、郡山市で鍼灸医として自立しているが未だ日本の風俗習慣、日本人の気質になじまず、苦勞の日がつづいてゐる。長女悦子も本年六月家族と共に帰国し、所沢の中国帰国孤児定着促進センターに入所し、言葉や習慣を学び、十月一日から郡山市に永住することになった。

この家族も養母も一緒であり、これからの苦難の日が続くと思われるが長男長女と、お互いの過去と今後のことなど語り合いたいと思つてゐる。

今考えると、あれ程に盡忠報国、五族協和の理想に情熱を燃やした幾百千万の人々の血と涙は、何のためであつたのか、恐らく最後の一兵までも命令のまま、戦い死ぬ覚悟であつたのが終戦により、ピタツと銃火を止め、妻子家族のもとに帰れるかと思つたら、今度は極寒地に向かつて連行され従順に強制労働に励み、幾十万人が死没し、助かつた私も無我夢中で働き通し、しかも戦後復興、祖国再建に汗を流し、現在でも年中無休で仕事に精を出し、雑事に追い回され貧乏暇なしである。

あの戦争がなかつたら私の生涯も変わつてゐた筈である。

私の戦争の「キズアト」は私が死ぬまで続くだろう。

## 七人の子供と共に

滋賀県 山村 千秋

一生忘れることの出来ない昭和二十年五月十五日、この日がこの世での主人の顔の見納めでした。これでも一人前の男となつたと表面はいたつて元氣に家を出ました主人、僅か十四歳の長男に「あとを頼む」と一言、その時長男の下には長女、次男、三男、四男、次女、そして一週間後に五男の出産日を控えている私を残しての出征、その時の主人の心中を思いますと断腸の思いで一ぱいです。

戦局の不利を案じ、生れてくる子のためにと、ほしい物資の中でいろいろと準備に追われての心細い一日一日が過ぎて行きました。予定通り、主人の留守中